
有閑倶楽部 ~ 七人の主人公 ~

夜叉の飄然 = 飄逸 = 縹緲！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有閑倶楽部〜七人の主人公〜

【Nコード】

N9152N

【作者名】

夜叉の飄然Ⅱ飄逸Ⅱ縹緲！

【あらすじ】

ブルジョア学園の聖レジスト学園。
剣菱悠里。白鹿野梨子。菊正宗清四郎。黄桜可憐。松竹梅魅緑。美童グランマニエ。そして、もう一人。
我らが銀さんこと、坂田銀時である。

有閑倶楽部に銀さんが交ざりドタバタシリアス学園バトルホラー＆コメディー!!!

【この小説は、有閑倶楽部と銀魂のクロス作品です。
銀さんが、有閑倶楽部の世界（？）に転生した話です。
基本滅茶苦茶です。どちらの作品とも完結していない為、本当に滅
茶苦茶です。それでもよろしければお読み下さい。】
更新は不定期です。

第巻話 不可能を可能にする、有閑倶楽部！（前書き）

なんか、すいません。

ですが始まりました！

有閑倶楽部！キャットホーイ！

因みにドラマとは全く違うんで、悪しからず。

それと、有閑倶楽部で銀さんの銀髪とかいないんで、アルビノ設定にしました。

第巻話 不可能を可能にする、有閑倶楽部！

桜の花弁がひらひらと美しく舞う春。

ブルジョア学園の聖プレジスト学園。

その校庭に、何人かの生徒が見える。

「あふっ」

「御下品ですわよ悠里」

初っぱなから欠伸を噛み殺す一人の少女。その言葉に呆れながらも
う一人の少女が注意すれば、悠里は口を尖らせた。

「あたいだって好きにしてるんじゃないやい！
勉強勉強ばっかですまんないだよお」

「アンタ只でさえ成績悪いんだからちゃんと勉強しなさいよ」

「ほう、それはお前が言える事なのか、可憐？」

「……」

もう一人の少女が、悠里に悪戯っぽい笑みを浮かべながら言えば、黒髪の男子が、言う。その言葉に顔を歪めた。

少女の一人は、黄桜可憐。黒髪の男子は、菊正宗清四郎。

「まあまあ、そう争うなって」

「お前も人の事言えないからな」

「……」

金髪の男子が、二人を宥めるように口を開き、その言葉に機械いじりをしていた男子がにやりと笑いながら付け加える。金髪の男子は、ギクツと体が反応したかと思えば、何だよー！と反論するが無視。

金髪の男子は、美童グランマニエ。機械いじりをしていた男子は、松竹梅魅緑。

剣菱悠里は世界的大財閥の令嬢。白鹿野梨子は、茶道家元の母を持つ大和撫子。黄桜可憐は、宝石商の娘。菊正宗清四郎は、大病院の息子。松竹梅魅緑は、警視総監の息子。美童グランマニエは、スウエーデン大使の息子。

それと

「おー、ワリーワリー遅れた」

怠そうな声が唐突に聞こえた。

皆が一斉に振り返る。

ふわふわとした銀髪の天然パーマ。

死んだ魚のような目をした深紅の瞳。

腰に差した柄に洞爺湖と書かれた木刀。

坂田銀時。

「ちょっと、銀時遅いわよ。また遅刻？」

「オイオイ、銀時。あたいだって遅刻なんてしないぞ？」

「銀時はダメな生徒の見本ですわね」

「そろそろヤバイと思いますよ」

「しっかりしろよ銀時」

「良かったら目覚まし時計でも作ってやるっか？」

「いや、違ーよ。てめーら、人を遅刻魔にしてんなに楽しいか！

いやよ、登校してる時におばあちゃんが居てだな？」

「野梨子、困暮しません？」

そう。

彼、坂田銀時は、前世の記憶があるのである。

現在は、一人暮らし。両親がいなかったので、一人で地道に（大幅は裏の仕事）働き多少金持ちになるまでたどり着いた。

坂田財閥である。

容姿については、アルビノ種。

色素欠乏。多大なストレスにより色素に異常をきたし、髪は銀髪、目は血の色である深紅。皮膚は、やや赤い。

「面倒くせーな」

銀時はその銀髪を指に絡ませわしわしと無造作に掻き荒らすと、天を仰いだ。

第壹話 不可能を可能にする、有閑倶楽部！（後書き）

うっわ、本当に滅茶苦茶だよ

次回

「…………アレ？俺の木刀はアアアア！？」

次回、『第弐話 ほのぼのにゃ、トラブルはつきモンってーモンだ
る』

誰だ俺の木刀パクリやがったのは！出て来いやアアアア！！」

第2話 すっぱーほのほのじゃ、トラブルはつきモンってーモンだろ(前書き)

こちらも投稿) *、*、*

所々変な所ありますが目を瞑って下さい))>。()。。

第貳話 すっぱーほのぼのじゃ、トラブルはつきモンってーモンだろ

ダンダンダンダン

次々と体育館に鈍い地響きがする。生徒等がバスケットボールをしているのだ。そのドリブルで体育館はすごい音である。

「ダアアアナークー！！」

ダアン！

「ぶばあああつー！！」

急気な声が響いたかと思えば、ダンクをしたボールがそのまま下にいた相手チームのエースの頭に直撃する。

「フリーフリー、まさかいるなんて思わなかったもんで」

「明らかに分かってだよね！？ だって見たもの！ 目がめっちゃこつち見てたものおお！」

「うるっせんじゃナルシストお！ エースだからって調子のんじゃねー！」

「今の発言で明らかに故意丸出しだろーがアアアア！！」

銀時である。エースである相手に嫉妬し、わざと直撃させたのだ。

「元気だなあ」

「そついうお前は違うな？」

銀時の試合を見ながら、落ち込んだ感じを曝け出す美童に、魅緑が水分補給しながら問いかける。

「実はさ、何か最近物が無くなる事が多いんだよね」

「んだそりゃ？」

バツの悪そうな顔をしながらハアツとため息を吐く。その言葉に魅

緑は聞き返した。

「この前、な。」

「おっ」

「俺の宝物のファッションモデルが載ってる雑誌が、無くなったんだよ！」

「……………へー」

真剣に言う美童に、呆れる魅緑だった。

キンコーンカーンコーン

体育終了。

チャイムの音と共に最後の挨拶をした後、更衣室に戻りロッカーを開けた時だった。

「…………アレ？」

い。今、現在銀時は一人である。いつも人より遅れて行くので誰もいな

自分の着替えの制服。

そしてもう一つあるべきもの。

「木刀がねエエエエエエ!!」

更衣室にただその叫び声だけが訝した。

「つまり、体育の授業が終わったら木刀が無かったと」

「全くもってその通りでございます」

冒頭のセリフは清四郎である。

呆れている。完全に呆れている。そう物語っているのが顔に赤裸々に窺えた。

「いいんじゃない、木刀くらい。また買えば」

そう言うのは悠里。チップスをボリボリと荒々しく貪っている。

「バカヤロー、ダメなんだよアレ。高いんだから」

銀時がはあーっと盛大にため息を吐きながら言葉を繋ぐ。

「アンタその貧乏性何とかしなさいよ」

可憐が呆れながら言う。

あー、しまった。銀時は内心しかしたと舌打ちをする。今の状態は、金持ちの身である。そうであると言うのに銀時はたかが木刀一本で狼狽えているのだ。昔の癖である。

やべーよ、ばれるってコレ。だってこの木刀、前世と同じなんだから。いつの間にか持ってたんだもの。

「……………」

ま、いや。

可憐の言葉を聞かなかった事にした。

「下駄箱にでも手紙とかあるんじゃないのか？」

首にかけているタオルで流れる汗を吹きながら魅緑が淡々と口を開いた。

だが周りには誰もいない。

現在此処は便所。

休憩時間のうちに済ませておこうと来たのだ。

銀時の木刀紛失事件を考えながら、自然とそれが頭に浮かんだ。

行ってみるか。

そう決めると階段を降りていった。

十

坂田坂田はーっと。

銀時の名字を言いながら、下駄箱を探す。すると、坂田、と名字が発見。

躊躇わずにパカッと蓋を上上げた。

ゴッ！

「ぶっ……ッ！！」

何かが魅緑の顔面を直撃。

鼻だ。鼻に直撃した。

タラリと、生暖かい何かが鼻から垂れてきたのを感じ、手で少し触れると、目前で持つてくる。

「……ってー。鼻血……」

赤い液体。鼻血だった。

一体、何が当たったんだ？

タオルで鼻を押えながら銀時の下駄箱を再確認する。中には、両端に付けられたゴムに、下にコロリと転がった石。

「やられた……」

パチンコと同じ要領である。

蓋によってゴムが引かれ、限界で弾けた後、仕掛けていた石が勢い良く発射し……今に至る。

ん？

銀時のボロボロにされた黒いスニーカーの上に、白い紙。

ソレに、手を伸ばした瞬間

「魅緑！！」

「魅緑！！」

銀時は魅緑と同じような考えが思い浮かび、下駄箱まで来たのだ。

だが、下駄箱にはタオルを真っ赤に染めた魅緑。

銀時は思わず叫んだ。

すると、魅緑が目をはちくりさせながら驚いたように此方に目をやり何だお前か、と呟くと、続いて見るよと親指をたてソレを銀時の下駄箱へと向ける。

「ちよ、お前、その前に血だらだらじゃねーか！ 見るよじゃねーよ！ かつこつけてんじゃねエエエエ！！」

「つけてねーよ！ コイツは後で説明すつから、とりあえず見るよ」

銀時の叫びを同じように叫んで返すと、再度魅緑が下駄箱へと親指を向ける。

「白い紙？」

「俺たちが思ってたヤツだろ。 手紙。」

銀時は白い紙を手にとってヒラヒラさせ眉を寄せた。魅緑は銀時も俺と同じだろうと推測して口を開く。

「んー？何ターい？」

坂田へ

木刀返してほしけりや放課後体育館裏来いや

と、殴り書き。

「ぶ、ぶぶつ。 おまつ、体育館裏つて！ ベタ過ぎるわ！ んなモンもうやりつくされてんだよ！」

「や、そこはツツコミ無しで」

腹を抱えて笑いだす銀時に、魅緑が肩にポンと手を置き静めさせた。

「別に行かなくてもいいんじゃないか？ 絶対いるもんてな理由じやねーんだろ？」

「いや、アレ高いし。 それによ、俺の友達をこんな目にあわせただ、黙ってるわけねーだろ？」

肩越しににっと厭らしく笑う銀時に、魅緑は素直に感動した。

「お前、良い奴だったんだな！」

「んだよソレ！ 今気付いた感やめてくんない！？ 銀さん良い奴だから！」

銀時の嘆きが下駄箱に虚しく響き渡ったのであった。

「ああん？ …つか俺何かしたっけ？」

少々不気味な雰囲気である。

体育館自体は真新しい程綺麗な印象は受けるが、体育館裏へと足を勧めればそれはもう打って変わる。

スプレーなどで落書きされた壁。その辺にバット等が無数に無造作に転がっていた。

「ひでー絵だなアオイ」

正に此処でヤのつく奴らが、ああん？何じゃワレ。喧嘩うっとなのかゴラ！とか言ってるきそうな勢いである。ふーっと息をついた。

皆さんお察しの通り、現在待ちに待った放課後。そして、コレまたベタな体育館裏へと足を踏み入れたのだ。

「
」！

ブオンツ！と背後から風が唸る音が聞こえる。瞬間に、銀時は前方へと転がった。

「……………っち、避けやがったか」

「あん？ なんだよお前。つか誰だ？」

舌打ちした相手に、銀時は体勢を整えると相手と向かい合う。

相手は金属バットを片手に、もう片手にはバスケットボールを抱えている。

「だ、誰だと?! てめー、この顔を見ても分からねエのか!?!」

「いやいや、俺男に興味な」

相手の顔に、まさにバスケットボールほどの丸い円が、赤くなって刻まれ等っていた。

「あ! お前、ナルシストじゃねーか!」

「ナルシストじゃねエエエ!」

銀時の言葉に相手は顔を真っ赤にして更に怒鳴ると、にっと笑った。

「エースだ!」

「えっ、まさかのあの某海賊の弟を持つ火拳の」

「違エって言うてんだろぅがアアアア!!! お前マジ人の話最後

まで聞けよっ！！ 完全分かってんだろ！ 絶対分かって言っただろ！！」

「いやいや、オタクよオもう一度自分の言った言葉思い出してみ？ 確かにエースだったから。 エースだったならアレしかねーだろ。」

.....

「バスケットボールのチームのエースだっつってんだよ！！」

「ああ、なるほど。」

「やっと分かったのか……」

「つまり、ナルシストのヤツだな」

「だーからア、ソイツは一体どこで繋がってここに表されてんだよ！……」

等々、来た瞬間からおっぱじまったこの口喧嘩を何分か続けた後、自称エースがゴホン、とわざとらしく咳する。

「つまりそういう理由だ！」

「オーイ、ナルシスト。主語抜けてっぞ主語が。」

また始まる口喧嘩を省略。簡単に言つとこつといつことである。

- ・ちよつかいを出す銀時に苛ついた
- ・モテているヤツがムカついて物を盗んだ

らしい。

「後半関係なくね？俺コレといって全くモテてませんけど」

「鈍感&無自覚はいいんだよ！」

「…？ まあ、いや」

自称エースの言っている事に疑問を感じつつ、銀時は無理矢理話を進めた。

「まっ、俺へのちよっかいは許してやるけどよ。 ……俺の友達^{ダチ}に怪我させたっーんなら、

容赦しねーぜ、ナルシスト」

ぐっと拳を固く握る。固く、固く。それはまるで思いの強さを物語っている用でもあり、深紅の瞳で自称エースをすっと思据えた。

「へっ、丸腰で何が出来るんだよ。 オイ、てめーら」

自称エースがニヤリと口角を上げ、不気味に顔を歪める。次いで何かに声をかけると同時に、そろそろとソレは姿を現した。

「またこらア、そろそろとご苦労なこつた」

正にヤのつく奴ら。 擲^{やく}貢^{くび}挫^げである。または不良。が、どこからともなく。

「また沢山出てきましたね」

「ひえーっ、銀時大丈夫なのかよ!？」

「これは驚きましたわ…」

「いいな」

「何でお前は戦いたそう何だよ」

「やだわー。 あんなに群がっちゃって。 銀時大丈夫なの？」

と、皆それぞれ呟く。

上から順に、清四郎、美童、野梨子、悠里、魅緑、可憐だ。銀時のいまの現状を、皆双眼鏡を装着し、体育館倉庫の屋根から覗いていた。

「醜いねエ。 ったく、面倒くせエな」

「丸腰のてめエでこの人数じゃ、流石に無理だろ。 行け！」

自称エースが仲間に表示を出す。その指示に従い、仲間がバットやら棒やらを構えてゆつくりと歩いて行く。

「……ったく。 やれヤクザだやれ不良だやれナルシストだ、意味分かんねーんだよ！ 全っ然、均衡保ててないんだよ！ 今に自殺しそうな崖っ淵の犯罪者ですか、コノヤロー！」

「例えが意味わからないわよ……」

可憐が銀時の独り言に呆れながらツッコミを入れる。

「最近のヤツらは気が短くていけねーや」

そう言った瞬間だった。

長く息を吐いたかと思えば、銀時の姿はそこにはない。

清四郎が、柄にもなく目を見開き指を指した場所には、自称エースと向かい合う銀時。

その銀時の後ろには、先ほどの仲間たちが白目を剥いて気絶していた。ヤツらの腹には、抉ったように歪にへこんだ後があるだけだった。

「……………あ、……………え？」

瞬殺。

その言葉以上の表現などあるうか。本当に字の通りなのだ。何があったのが全く分からない。

だが、転がっている仲間の状態から見て、腹に一発決められたようだった。

「さあ、おとなしく っと」

二度目のバット攻撃。銀時はあっさり躲すと、拳をぐっと握り締める。

「たっ」

「おぐっ!?!」

「とっ」

「ぐえっ!」

「とっ」

「うばあつー！」

最初に顔面に拳をたたき込み、次いで腹に膝蹴りを入れ、そのまま手で回転をつけて回し蹴りをこめかみに決めた。

「はい一件落着」

自称エースの背中に隠してあった木刀を奪い取ると、腰に納め手をパンパンと叩く。
はた

「シーユーアゲイン」

と、言った後…

「あ、間違えた。　デイドパスアウェイ」

「や、違うな、……ま、いいわ」

もう一度言い直し、その場を飄々と去っていった。

「え？」
「それで終わり？」

悠里が詰まらなそうに舌打ちした。

第貳話 すっぱーほのぼのじゃ、トラブルはつきモンってーモンだろ（後書き）

うわー銀ちゃんの活躍書きたかったけど……うわー（泣）

次回

「てめエ、それでも親かよ！俺に親何ていたことがねーからわからねーさ！だがな、実の娘をそんなふうにするなんて、母親失格じゃねーのか！」

次回、『第貳訓 親がいてこそ子供』

悠里に謝れっーの！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152n/>

有閑倶楽部～七人の主人公～

2011年10月9日18時23分発行